

# 院外心肺停止症例に対する新たな予後予測式

関西医科大学提供  
作成日 2016年2月19日  
更新日



<b>研究者氏名</b> はやかわ こういち 早川 航一	<b>所属機関</b> 関西医科大学医学系 研究科救急医学講座	<b>関連キーワード(複数可)</b> 院外心肺停止、心原性、自己心拍再開、予後予測
<b>主な研究テーマ</b> ・心原性院外心肺停止症例に対する集学的治療効果に関する研究		<b>主な採択課題</b> ・若手研究(B)平成24～27年度(配分総額:3,510千円) 課題名「心原性院外心肺停止症例に対する集学的治療効果に関する研究」

## ① 科研費による研究成果

我々は地域網羅的なウツタイン大阪のデータを用いて、心原性院外心肺停止症例に対する的中率の高い予後予測式を確立し、2012年 Resuscitation誌に発表した。本予測式は自己心拍再開直後に予後予測できる利点を有している反面、病院到着後の検査結果や治療内容が予後に与える影響については考慮されていなかった。そこで2011年に大阪府全13の3次救急医療施設が参画するCRITICAL study groupを設立し、ウツタインデータ(病院前データ)に病院到着後データを連結させるレジストリーを確立した。本レジストリーでは年間2000例の院外心肺停止症例が登録され、世界にも類をみない貴重なデータが得られている(Journal of Intensive Care, 2016)。CRITICAL studyのデータを用いて、新たな予後予測式を確立した。救急隊現着時の心電図波形がVfの症例の予後予測因子は“年齢”と“虚脱から自己心拍再開までの時間”、“病院到着後初回base deficit”であった。また、心電図波形がPEA/Asystoleの症例では“虚脱から自己心拍再開までの時間”と“Vfへの移行の有無”、“来院時カリウム値”であった。予測式のArea under the curveはそれぞれ0.862、0.944であり、2012年に確立した予後予測式より精度の高いものであった(36<sup>th</sup> International Symposium on Intensive Care and Emergency Medicineで発表予定)。脳低温療法や経皮的人工心肺装置が予後に与える影響についてはpropensity score matching analysisを用いて現在解析中である。

## ② 当初予想していなかった意外な展開

とくにありません。

## ③ 今後期待される波及効果、社会への還元など

本予測式は積極的治療適応の判断や患者家族への予後説明等に有用であると考えます。また、今回確立したレジストリーから今後新たな知見を世界に発信したいと考えています。